

たんにしょう 『歎異抄』のおはなし⑦第五条

今回の第五条は、すでに亡くなられたご先祖や父母の追善供養と念仏のお話です。

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まうしたること、いまださふらはず。」

「孝養」とは、追善供養のことです。

(現代語訳)

〈親鸞は、亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。〉

親鸞聖人は、亡き父母のために念仏したことは、ただの一度もないというのです。
これでは、親鸞聖人は親不孝なのではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれません。
しかし、実はそうではないのです。

親鸞聖人は、幼い頃にお母さまと死別されたといわれます。お父さまのひのありのり日野有範の没年も、確かなことは伝わっていませんが、聖人が幼い頃に姿を消されたそうです。

幼い子供にとって、両親との別れは、とてもつらいことではなかったかと思われます。

ですから天台座主・慈円のもとで京都の青蓮院しょうれんいんで出家得度して、九歳で比叡山ひえいざんに上られた聖人が、ご両親への追善・追慕ついでの念がなかったとは思われないわけです。

しかし法然上人ほうねんしょうにんに出逢われ、他力念仏の教えに触れた聖人は、両親の追善のための念仏が、いかに無意味なものであったかを知るのです。

また親鸞聖人の時代には、亡き父母の追善供養のために念仏を称えることが、盛んに行なわれていたそうです。

念仏には死者をよき世界に導く力があると思われていて、念仏を称える自分の手柄を死者に振り向けるというのです。

自分が称えた念仏の善を積み、死者に施し、死者の冥福ぜんこんくどくを祈り、死者に善根功德を与えるのです。親鸞聖人はこの第五条で、そうした自力念仏の世間の風潮を批判して、他力念仏を強調しているのだと思われます。

◎親鸞聖人は、なぜ父母のために念仏を称えないのか？

「そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」

「有情」というのは、こころあるもの、いのちあるもの、生きとし生けるものという意味で、「衆生」と同じことです。

「衆生」は中国で五、六世紀以前に使われた訳語（旧訳）であり、インドのサットバ(sattva)という言葉が中国で衆生と訳されました。ところが七世紀になると、有名な玄奘三蔵がインドへ留学して十数年学んで帰り、多くの経典を訳しました。それ以降の翻訳では、サットバは「有情」と訳されるようになります。これは「心を持った、心あるもの」という意味です。親鸞聖人もご著作の中で、比較のお若い時に書かれた『教行信証』（52歳頃に草稿が仕上がったといわれる）や『浄土和讃』『高僧和讃』（76歳）などでは「衆生」の方を多く用いられましたが、晩年のご著作や『正像末和讃』（85歳以降）などでは、新訳の「有情」の方をよく使われました。

「世々生々の」は、長い世をかけて幾度も生まれ変わることです。

（現代語訳）

〈そのわけは、すべての命のあるものはみな、これまで何度も生まれ変わり死に変わりしてきた間に、父母であり兄弟・姉妹であったのです。〉

ここでは、なぜ父母のために念仏を称えないのかという理由を、親鸞聖人は述べています。

なぜかといえば、一切の生きとし生けるものは皆、いつの世か、あるいはどこかで、これまで過去に生まれ変わり死に変わりしてきた多くの生涯において、皆自分の父ともなり母ともなり、兄ともなり弟ともなりしてきた親族だったというのです。

ですから私以外の生きとし生けるもので、私に関係のないものは一人もいないといわれるわけです。

輪廻とは、生ある者が生死を繰り返すことを指し、インドで広まった考えです。

この輪廻思想によれば、この世に生きるものは、すべていずれかの過去の生において、自分と血縁関係にあったと考えられます。

仏教では、解脱すなわち煩惱から解放された自由な心境とならない限り、生ある者は迷いの世界である三界六道を輪廻しなくてはならないと考えられました。

輪廻の無限の生まれ変わりでは、人間はおろか虫や鳥さえもが、いずれの生においてか自分の父母兄弟であった可能性もあるのです。

ですから父母兄弟を慈しまなくてもよいわけではなく、自分が生きている世界の中で、自分と関

わりのあるすべての他者を父母兄弟と同様に慈しんでいくのが、私たちに必要なことなのです。このためには、今の生において父母だけの追善供養を念仏によって行なうよりも、すべての存在を救済するために念仏を称えることの方が大事だというわけです。ですから縁のある人のみを重要な存在と見て、その狭い世界の人たちだけに愛情を限定するのではなく、一切衆生の救済をめざして念仏を称えるべきだと、親鸞聖人は考えたのです。

また一人の人間が存在するためには二人の親があり、その親はさらに二人ずつあるということを十代^{さかのぼ}遡ると、自分に関わりのある親の数は千人を超えるそうです。それからさらに二十代遡ると、自分に関わりのある親の数は、百万人を突破するそうです。今のご法主は第26代目だそうですから、鎌倉時代まで遡ると、この人数になるというわけです。そして三十代遡ると一億三千万人にもなるのだそうです。それくらい多くの人々が、自分に関わりのある親なのです。これは想像もできないことです。

そのように考えていくと、私たちにご縁のあった人の数は膨大なものになります。ですから自分と関係のない人は一人もいないとも考えられるわけであり、自分の両親だけの狭い範囲の人々を供養するだけではなく、すべての人々の救済を目指すべきだというわけです。

「いづれもいづれも、この^{じゆんじしやう}順次生に仏になりてたすけさふらうべきなり。」

「いづれも」とは、だれも、みなみな、という意味です。

「^{じゆんじしやう}順次生」というのは、現在の生が終わった次の生のことで、この次に生まれ変わる生涯のことです。

(現代語訳)

〈したがって、この世の命が終わったら、次の世には浄土に往生して^{ほとけ}仏となって、すべてのいのちあるものを助けなければならないのです。〉

今の^{しやば}娑婆でのいのちを終えた後の次の生では浄土で仏になって、どの人も助けてさしあげるべき人びとであるというのです。

前回も少しお話しましたが、これを「^{げんそうえこう}還相廻向」と言います。

「^{おうそうえこう}往相廻向」のお働きで、お念仏を称えて死後に極楽浄土に往生した^{あかつき}暁には、浄土で仏となって、また娑婆世界に還ってきて、衆生を救う働きをするといわれます。これが「還相廻向」です。今度生まれ変わって仏になったら、一切の衆生を助ける身になるのですから、狭い考えで自分の両親だけを救えばよいというわけではないのです。

「わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して父母をもたすけさふらはめ。」

「わがちから」というのは、自力のことです。

「廻向」とは、自分のよい行ないの結果を他の人に廻らして与えることです。

(現代語訳)

〈念仏が、わたしの力で努める善であるなら、その念仏の功德によって亡き父母を救いもしましょうが、念仏はそのような自力の行ではありません。〉

念仏がもし自力の善行であったなら、その念仏の功德を振り向けて、自分の亡き父や母を助けることもできるでしょうけれど、念仏は自分の力で励む善行ではないのです。

わたしが称えるお念仏は、わたしが自分の力で善い行いを積み重ねたものではなく、阿弥陀仏から称えるように仕向けられ賜ったものなので、他人に施すことはできないのです。自分でお念仏を称えているようで、実は仏様が、私がお念仏を称えるように働きかけておられるのです。

ですから自分の力で称える念仏は「自力廻向の念仏」であり、正しい念仏ではないのです。

仏様から差し向けられて称える念仏は、「他力廻向の念仏」といいます。

煩惱で汚れた私たちは、この他力廻向の念仏によって、まず浄土に生まれて仏になり(往相廻向)、それから再びこの世に帰ってきてはじめて、他の人に念仏する(還相廻向)べきだといえます。

ですから死者の追善供養のための念仏というのは、親鸞聖人にとっては無意味なのです。

無力で愚かな私たちは、自力の考えを捨てて、全てを阿弥陀如来におまかせする以外にありません。

「ただ自力をすてて、いそぎさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、云々。」

「六道・四生」ですが、「六道」は①地獄道②餓鬼道③畜生道④修羅道⑤人間道⑥天上道の、六種類の迷いの人間世界のことを言います。衆生が自分の行ないの結果によって、生死を繰り返す六つの世界です。

①の地獄道は苦しみがいっぱいの世界です。悪業を積んだ者が墮ち、種々の責苦を受ける地下世界のことですが、実は地獄というところがどこかにあるのではなく、苦しみのあるところが地獄であるともいわれます。通勤地獄、受験地獄、借金地獄など、現代にも地獄があります。

②の餓鬼道は餓えた鬼と書きますが、嫉妬深かったり物惜しみやむさぼる行為をした人が赴く世界です。食べ物を口に入れようとすると火となってしまう、餓えと乾きに悩まされる世界です。

仏説孟蘭盆経という、お盆の法話でよく登場するお経の中で、目連尊者のお母さまが物惜しみした結果赴いた世界が餓鬼道でした。

- ③ の畜生道は牛馬など畜生の世界で、前世の悪業の報いにより動物に生まれ変わった境涯です。本能のおもむくままに生きている世界です。
- ④ の修羅道の修羅は阿修羅の略で、闘争や戦闘を好む鬼神の世界のことで、苦しみや怒りが絶えない世界です。興福寺の阿修羅像は有名です。
- ⑤ の人間道は、人間が住む世界であり、四苦八苦に悩まされる苦しみの多い世界ですが、苦しみだけではなく楽しみもある世界です。自力で仏教に出会える世界でもあり、解脱して仏になりうる可能性もある世界です。
- ⑥ の天上道は、天人が住む世界です。天人は人間よりも優れた存在とされ、寿命も長く苦しみも人間道よりは少ないですが、煩惱からはまだ解放されておらず、仏教に出会うこともなく解脱もできない世界です。

「四生」は、以下の四種類の有情のことで。

- ① 「胎生」と言っ、哺乳類など母親の胎内から生まれるもの
- ② 「卵生」と言っ、鳥や魚など卵から生まれるもの
- ③ 「湿生」と言っ、ボウフラやカビなどのように、湿気のあるところから生まれるもの
- ④ 「化生」と言っ、天人など自分の業の力により変化して忽然と生まれるもの

例えば、心が慈悲心で満たされると菩薩と呼ばれたり、心が残酷性や憎しみに占領されると修羅になるというのが「化生」であり、心の持ち方によって変化することを言います。

六道に四生を加えたものは、輪廻するすべての存在のことであり、これらは迷いの存在です。

「業苦」とは、悪い行ないの結果として受ける苦しみのことです。

「神通方便」は、仏のもつ自由自在で不思議な救済のはたらきのことです。

「六神通」といわれるのは、①神足通（飛行、変身など、以下の五つに含まれない超能力）②天眼通（あらゆるものを見通す能力）③天耳通（あらゆる音を聞く能力）④他心通（他人の考えていることを知る能力）⑤宿命通（過去世の生存の状態を思い出す能力）⑥漏尽通（自分の煩惱が尽きたことを知る能力）の六つをいいます。

「有縁」とは、自分に関係のある者、縁のある者のことです。

「度す」というのは、済度する、救う、迷いの世界からさとりの世界へ渡すということです。

（現代語訳）

くただ自力にとらわれた心を捨てて、速やかに浄土に往生してさとりを開いたならば、父母や兄弟姉妹たちが六道や四生などの迷いの世界にさまざまな生を受けて、どのような深い苦しみの中に沈

んでいようとも、仏の不可思議なはたらきによって、まず縁のある人々を救うことができます。
このように聖人は仰せになりました。〉

この「いそぎさとりをひらきなば」については前回も触れましたが、私たちがこの世で生きている間に往生して仏の覚りを開くということではなく、あの世において覚りを開くことであると解釈されます。

しかし現生正定聚とって、この世で生きている間に往生が定まる位につくことを往生と解釈する学者もいるようですが、煩惱に満ちた私たちがこの世で覚るといふことは、やはりあり得ないのではないかと思います。

現世において、煩惱に満ちた私たちが父母兄弟や子孫を自分の力で救い取るのは、難しいことです。ましてや死んで六道をさまよう父母兄弟を自力で救い取るのは、到底無理なことです。

それを救うためには、まず自分が浄土で仏になってからだというわけです。

自分が自力を捨てて、あの世へ往生して仏になったなら、六道・四生ろくどう しじょうの間で業苦ごうくに沈む父母兄弟を神通方便じんずうほうべんで救い取ることができるということです。

念仏者は、死後に急ぎ仏となって、まず縁ある者を救うべきであり、念仏はそのために与えられたもので、父母の追善のためだけに用いられるべきではないのです。

父母の追善の念仏は、自力の善となるからです。

他力廻向の念仏は、生死の境を越えて、あらゆる生きとし生けるものを救うものだといひます。

亡き人に何かしてあげたいと思うのはもっともですが、私たちの行なう善行は、結局は自分中心で執着が混じった、思い上がった善にすぎません。

ですから亡き父母や兄弟のための称名念仏というのは自力であり、他力念仏本来の精神に背くものです。

この第五条では、親鸞聖人の当時、念仏が父母の追善供養の道具として呪術化じゅじゅつかしていることを聖人は戒めて、すべての人が成仏じょうぶつするための他力の念仏を明らかにしたのです。

そして念仏は自分が積む功德ではなく、仏様の導きで称えさせていただいている、それが真の他力の念仏なのです。

今日は、これくらいにしたいと思います。次回は 11 月 23 日の報恩講の時に、第六条を拝読したいと思います。どうもありがとうございました。